



# 会報



DISTRICT 253  
CLUB BULLETIN

創立 S34.6.9 承認 S34.6.27

## 鶴岡ロータリー

THE ROTARY CLUB  
OF TSURUOKA

田 植

例会場 鶴岡市馬場町 物産館3階ホール  
例会日 毎週火曜日 12:30-13:30  
事務所 鶴岡市馬場町 商工会議所内  
電話 0235 (2) 5775

会 長 上 野 三 郎  
幹 事 佐 藤 順 治

全人類を 結びつけるために 奉仕せよ

SERVE TO UNITE MANKIND

W. ジャック・デービス

1977~78 国際ロータリー会長

第 955 号

1978. 5. 2 (火) (曇)

No.42

### 本日のプログラム

1. 点 鐘
2. 国 歌 斉 唱
3. ロータリーソング (奉仕の理想)
4. ビジター・ゲスト紹介
5. 会員及び奥様誕生祝 親睦活動委員会
6. 年間皆出席者表彰 出席委員会
7. 会 長 報 告
8. 幹 事 報 告
9. 台中港区関係について 佐 藤 忠 君
10. ゲスト・スピーチ 民俗と柳田国男 鶴岡芸術振興会議 理事長 戸川安章氏
11. 出 席 報 告
12. 点 鐘

## ■ ビジター紹介

池田好雄君(僧侶) 立川R.C  
齋藤健治君(農業) 菅原年雄君(建設) } 鶴岡西R.C  
羽根田正吉君(建設) 佐藤 拓 君(内科医)

## ■ スマイル

早坂徳治君——えるさん新店舗落成されました。

## ■ 会員及び奥様誕生

- <会員誕生> 阿部公一君、半田 浩君、三浦悌三君、諸橋政樹君、中野重次郎君、  
佐藤友吉君、板垣広志君、市川輝雄君、迎田 稔君
- <奥様誕生> 石黒常様(慶之助)、板垣喜美子様(俊次)、黒谷貞子様(正夫)、  
西海幸子様(正一)、高橋良子様(耕二)、上野和子様(三郎)、  
山口マサキ様(篤之助)

## ■ 年間皆出席表彰

- 4年間皆出席 風間慶三君  
3年間皆出席 山口篤之助君  
4月150%出席 佐藤順治君、山口篤之助君  
4月125%出席 安藤定助君、早坂源四郎君、川村徳男君、小池繁治君、三井徹君、三井  
健君、西海正一君、佐藤友吉君、内山喜一君、鈴木弥一郎君、高橋良士  
君、上野三郎君、吉野勲君、佐藤忠君  
4月100%出席 42名

## ■ 会長報告

- (1) 本日の例会にプレントン君が出席されていますか、配布された会報にタイミングよくプレントン君のあれこれ載っています。  
尚、プレントン君に今月のお小遣がわたされました。

## ■ 幹事報告

1. 例会日時、場所の変更

- (1) 鶴岡西R.C、温海R.C

鶴岡西(5月12日) 温海(5月15日)の例会は合同例会のため次の通り変更

(イ) 日 時 5月12日(金) P.M 3:00

(㊦) ところ 関川 金 沢 屋

(㊧) 登録料 4,000円

## 2. 会報到着

(1) 塩釜R・C

(2) 東京国際大会だよりNo. 4

## 3. 適用相場変更について

下記の通り適用相場を一部変更する旨国際ロータリー中央事務局より地区を通じ連絡あり。

### 記

ロータリー財団寄付に適用するレートは5月1日以降1ドル220円とする。

## 4. 253地区1978～1979地区協議会のご案内

(イ) と き 6月3日(土)～4日(日) (前の計画6/17～6/18の処)

(ロ) ところ 天童温泉 滝の湯ホテル

(ハ) 出席義務者

次年度

(1) 会 長

(2) 幹 事

(3) クラブ奉仕担当理事

(4) 広報委員長

(5) 職業奉仕委員長 (他一般会員2名)

(6) 社会奉仕委員長 (他一般会員1名)

(7) 国際奉仕委員長

(8) 青少年奉仕委員長 (他一般会員1名)

以上12名、尚一般会員は入会后2年～3年以内の会員

## ■ ゲスト・スピーチ (民俗と柳田国男)

鶴岡市芸術振興会議

理事長 戸川 安 章 氏

民俗学という学問は、民間伝承の学ともいうように、われわれが日常生活の中で、昔からのしきたりによって祭りをしたり、盆や正月の飾りをしたり、先祖の霊を慰めるために法事を行ったり、両親から昔話や伝説を聞いて育つうちに自然とつちかわれ、はぐくまれた日本文化に対する理解、七五三とか厄年の祝いや儀礼、婚礼の儀式、農作業と信仰の関係——そうしたことは、日常茶飯事として伝承され、古人の書きのこした記録や文献にもほとんどしるされていないが、そういうことを村や町の故老、それもなるべく経験が豊かで、人びとの興味をそそるために誇張したことをいわないような方をえらんでその話を聞いて、記録し、印刷し、そうした研究をしている者たちの間で活発な情報の交換をし、土地や時代によって、どのようにそれが変化したかを検討し、それによって歴史の推移を知ろうとするものである。

歴史研究の学問には、古人の書きのこした日記・書簡・記録といったものを資料とする、いわゆる歴史学というものがある。これは、われわれが小学校以来、学んできたものであるが、昔は文字が書けるのは、ほんの一握りの知識階級だけであり、そういう人の書きのこしたものは、かれらの関与した政治・経済・戦闘の、それも勝利者に都合のよいものばかりであるから、資料としては欠陥があるわけで、そういう欠陥のある資料をもとにして書かれた歴史書には、資料批判の学問が発達した現代においても、なお欠陥を免れることができない。そういう観点から、学問や政治には縁遠いが、実質的には日本文化の基盤を担ってきた常民——平均的な日本人——の生活伝承によってその欠を補なおうとして生まれたのが民俗学である。

日本でこういう学問が芽生えたのは江戸時代の末で、屋代弘賢とか菅江真澄といった人びとを無視することはできない。そうした人の業績に注目し、その学風を継承し、発展させて日本民俗学を樹立したのは、明治8年に兵庫県で生まれ、昭和37年に88歳でなくなった柳田国男である。

柳田は松岡操とその妻たけとの間に生まれた。2人の兄と1人の姉は早く世を去り、長兄の鼎は姫路師範を卒業して小学校長となるが、後に医学を修めて茨城県に移り、利根川のほとりの布佐で開業した。柳田は13歳から16歳まで、この兄のもとで自由な生活を送った。これは、かれがいささか病弱であったため、健康なからだづくりをさせようという配慮によるものであったが、そうしたある日、村の鎮守の社で間引きの図を描いた絵馬をみて異常な感じを味わったという。こうした経験は後年の柳田の学問形成に影響するところが少なくなかったことと思われる。

次兄の泰蔵は後に井上家の養子となり、名を通泰と改め医師となったが、歌人としても名をなし、御歌所寄人に挙げられた人である。柳田は16歳の時にこの兄の許に移り、兄に伴われて森鷗外の許に出入りをするようになったことから多くの文学者と交わるようになる。それとともに松浦萩坪の門に入って和歌を学んだ。田山花袋との交りは花袋もまた松浦の門人であったことによる。そして、松浦の門に学んだことが、後に柳田家の養子となる因縁になったのである。

17歳の春、大学に進む資格をつけるため開成中学に編入学。19歳で一高に入るが、この頃にはひとかどの歌詠みとして認められるようになり、詩人や作家たちとの交わりも多く、一高3年の頃には新体詩人として一家をなすに至っている。22歳のとき、明治22年以来、長兄の許に同居していた両親が相次いで病死した。その翌年の明治30年には東大政治科に入学、31年の夏休みに伊勢湾に面した伊良湖崎に滞在する。このとき、台風の去ったあとの海岸にヤシの実が打ちよせられているのを見て、はるかに遠い南の海から漂いよってきたヤシの実の長途の旅を思い、なにか啓示のようなものを感じて友人にその話をした。それが藤村の「遠き島より流れよるヤシの実一つ」というあの有名な詩となるが、さらに大切なことは、この体験が、かれの日本民族のふるさとに関する研究の出発点となったばかりでなく、研究の到達点でもある『海上の道』に結実したという事実である。

明治32年には東大を卒業し農商務省の農務局に勤めるが、文学者との交際と文学活動はなお続き、かれの家はサロンのごとき様相を呈した。33年には大審院判事柳田直平の養子となり、2年後の37年には直平の4女孝子と結婚する。孝子、ときに19歳。

明治41年から大正2年までは宮内省書記官を兼任し、明治天皇の御大葬にも大正天皇の御即位式にも奉仕する。大正3年から8年までは貴族院書記官長を勤め、9年には朝日新聞の客員として招かれ、10年には国際連盟委任統治委員としてジュネーブに渡り、途中一時帰国するが再び渡欧。12年に帰国した。翌13年から昭和5年の末まで朝日新聞の論説委員。昭和7年には相次いで養父母が死亡。昭和16年にはNHK仙台中央放送局が行なった東北地方民謡試聴団の団長として町田佳声・折口信夫・小寺融吉・中山晋平らと共に東北地方を歩いた。このとき、山形県のサモジャ節と酒田節に注目し、のちのちまで関心を寄せているが、酒田節は当時既に歌詞のみ伝わり、うたえる人はなくなっていたし、サモジャ節は保持者が2、3人いたが、今では正しく唄える人がいない。

この年、朝日新聞社から文化賞を贈られたが、その賞金は地方で地味な研究をつづけている人たちに分け、その活動を助けるのに用いた。昭和21年には枢密顧問官に挙げられた。この歳、柳田の学問に共鳴する学者や弟子たちによって『古稀記念論文集』が刊行された。22年には自宅を解放して財団法人日本民俗学研究所を開設し、多くの研究家を育てているが、26年には文化勲章を授けられると、その年金は民俗学の発達のために用いている。28年には国立国語研究所評議会会長、文化財保存事業審議会委員となり、32年にはNHK放送文化賞をうけた。

昭和36年には最後の著述となった『海上の道』が出版された。これは、若き日に伊良湖崎で眼にしたヤシの実に触発されて以来、懐きつづけてきた日本文化の源流に対する思索・研究の集大成である。

昭和37年5月、弟子たちが集まり米寿を記念する会を成城大学で開いたが、この日、柳田国男賞設置が発表された。それから間もない8月8日、心臓衰弱のため88歳をもってその生涯をとじた。平均的日本人の日常生活の歴史や靈魂観、そして、わが国人の固有信仰についての研究をつづけてこられた先生のことゆえ、葬儀は神道によるものと考えていた人が多かったようであるが、実際には仏式によって行われた。このことについては、いろいろの説をなす者もあるが、私は家の伝統というものを大切にされた先生らしい葬後の祭りであったと思っている。

先生はその生涯を通じて実によく旅をした。朝日新聞社に入社されるときも自由に旅行をさせることを条件にしたほどで、この旅を通して地方の人々に接し、その話を聞くことが先生の学問の方法なのである。東北旅行中にある老人が、人は死んだら家の先祖になるんだ。おれもそうだ。と楽しそうに語ったことに感動し、日本人の靈魂観について研究され、その結果を『先祖の話』という著書にまとめているし、日本民俗学の出発点になった『後狩詞の記』は、明治41年に宮崎県に出張したとき、推葉村の老狩人から聞いた話を書いたものである。

柳田は、学問探究を目的としてその門をたたく者を拒むことは決してしなかった。山形県にもなん度か足を運んでいるが、町田川の道祖神の調査もしている。高島町の宍戸一郎氏も教えをうけているが、庄内人では羽柴雄輔・国分剛二・助川正誠ら地方史研究の先駆者となった故人たち、現在活躍している清野久雄君は先生に期待された弟子の一人で、日本民俗学会の前身である民間伝承の会の設立に重要な役割を演じた人である。現在、由良小学校の教諭菅原志津子（旧姓・紀）さん、服装学・家政学の分野で活躍し、2、3の大

学で教えている岡田照子（旧姓・嶺岸）さんらも、先生がその将来に期待をかけた人である。柳田の著書『桃太郎の誕生』にはいっている黒川の絵姿女房の話や『日本の伝説』におさまっている狩川のもろみ地藏の話などは、国分や助川が提供者だと聞いている。

柳田の兄・鼎と泰蔵（井上通泰）のことは前に書いた。弟の静雄は海軍大佐で退職したが、気骨のある人で、万葉の研究や南方ミクロネシアの民族の研究者としてその方面の著書も少なくない。輝夫については日本画家松岡映丘といえは知らない人はないであろう。

## 出席報告

|       |     |        |     |  |
|-------|-----|--------|-----|--|
| 本日の出席 | 会員数 | 69名    | 欠席者 | 皆川君、阿部(襄)君、半田君、玉城君、風間君、黒谷君、三井(健)君、中村君、佐藤(伊)君、佐藤(衛)君、佐藤(友)君、佐藤(正)君、笹原君、丹下君、高橋(良)君、山口君、諸橋君、渡会君 |
|       | 出席数 | 51名    |     |  |
|       | 出席率 | 73.91% |     |  |

|       |       |        |                |  |
|-------|-------|--------|----------------|--|
| 前回の出席 | 前回出席率 | 84.06% | メア<br>1ッ<br>クブ | 佐藤(元)一立川R・C<br>板垣(俊)君、玉城君、中村君、板垣(広)君、鶯田君、内山君、鈴木(善)君一鶴岡西R・C |
|       | 修正出席数 | 67名    |                |  |
|       | 確定出席率 | 97.10% |                |  |